

佳  
作

盂う  
蘭ら  
盆ぼん  
会え  
再ごにちのしに  
死がみ  
神

一  
幕  
五  
場

弓ゆ  
削げ  
の  
猿さる  
丸まる

## 孟蘭盆会再死神

### ねらい

落語の「死神」に着想を得、その後日譚と見做せる設定とした（作中で、落語にある死神祓いの呪文「あじやらかもくれん、きゅうらいす、てけれつつのばあ」を使用している）。「死神」の噺において命を失う男の、妻と息子に着目し、息子を主人公とすることで、普遍的な親子の情愛を描く。父と子、母と子、技を伝える師匠と弟子の疑似父子、それぞれの交情を通して、他者と自己への赦しと前進をテーマに据える。

主人公の少年は、素直で優しい性格だが、亡き父親へ消えないわだかまりを抱いており、物語を通じて父との関係を修復する。観客の若年層にはジュブナイルとして共感を、中高年層には子どもを応援するような親しみを、主人公に覚えてもらいたい。また、弱い部分を多く持ち、人生の落伍者となってもなお家族のために奮闘する父親も、観客の共感や好感を掴んでほしい。歌舞伎界の十代・二十代の俳優を主役に据え、その親世代の俳優にも役に魅力を感じてもらえる脚本を目指した。

題名通り作中の時季は七月の盆、上演される時季は八月納涼

歌舞伎を想定した。夏らしい幽霊譚を世話物でまとめ、終盤に派手なケレンを盛り込み、夏休み中の若い世代とその親世代の取り込みを意図した。「亡き人を忘れない」ことの大切さと、そうしたいと思う人間性が裏テーマであり、日本の八月らしい鎮魂と、芸を伝えて亡くなった過去の歌舞伎俳優に対する敬意と親愛も意識している。

### あらすじ

少年・半太郎は、前年に他界した父・丁助と同職の友人であった大工・甚五郎の通いの弟子。裏長屋に母・おすると二人で堅実に暮らしている。

七月十三日の夕、半太郎は、精霊馬を作りながら母と亡き父の思い出話をする。丁助は、腕は良かったが酒癖が悪く、ことに一年程前から急に羽振りがよくなると、酒量と乱暴が増え、ついにおすると半太郎は逃げ出した。仕立て仕事で生計を立てるおすると半太郎は、やがて丁助の訃報を受け取ったのだった。別れる前の父への反感と恐怖から、顔をよく覚えていないと言う半太郎。父のことも「お父つつあん」とは呼べずにいる。迎え火を焚いた半太郎の前に、死んだ父が現れる。父は「俺は死

神に騙された」と語り、死神に取り憑かれてから死に至るまでの経緯と、病人を助ける死神祓いの呪文を半太郎に教える。

「死神はおめえの仇だ。死神どもを俺に代わって退治してくれ」

十四日、親方甚五郎の家で父の話を聞く半太郎。甚五郎・おもと夫婦は半太郎を気遣いつつ、内弟子にならないかと持ちかける。同日、長屋の稲荷から狐神が現れ、日頃社の掃除をしている半太郎母子を助けようと言う。胡散臭さを感じながらも受け入れる半太郎。

十五日、甚五郎が急な病で倒れ、看病のために半太郎とおすゐが呼ばれる。駆けつけると甚五郎の枕元に死神が座っている。半太郎は丁助から、親方を助ける代わりに母おすゐの命を差し出すよう説かれる。逡巡の後、自分の命を差し出すことを決める半太郎。

死神祓いの呪文を唱えかけた途端、狐神が乱入して正体を現す。狐神を名乗っていたのは本物の父親・丁助で、丁助に化けて半太郎を唆していたのが、丁助の仇である死神であった。丁助が自分や母に向ける真の想いを知り、半太郎は思わず父に「お父つつあん」と呼びかける。

本物の狐神も現れ、半太郎たちは総出で死神集団に立ち向かう。回復した甚五郎が半太郎の精霊馬・精霊牛に、おすゐが

持ってきた丁助の玄能で魂を吹き込み、巨大化した精霊馬・精霊牛が死神たちを叩き伏せ、追い払う。

十六日の明け方、仇敵の死神を馬に括り付けて冥界へ追い返し、丁助は妻子と名残を惜しむ。「今度あ、おれの顔を忘れねえでいてくれよ」「忘れねえよ。自分のお父つつあんの顔、忘れるもんかよ」牛に跨って丁助は、半太郎とおすゐの見守る中、朝陽の中を帰ってゆく。

場割

第一場 稻荷長屋の場 (十三日午後)

第二場 両国橋の場 (十三日夕)

第三場 甚五郎宅の場 (十四日朝)

第四場 稻荷長屋の場 (十四日夕)

大詰 甚五郎宅の場 (十五日夜から翌朝)

風鈴売り

大工たち (六人程)

死神たち (八人程)

狐神

真の狐神

第一場 稻荷長屋の場 (十三日午後)

役名

半太郎 十三才の少年。大工見習い。

おすゐ 半太郎の母。

丁助 半太郎の父。半年前に死亡。

甚五郎 大工棟梁。半太郎の師匠。

おもと 甚五郎の妻。

清二 若い大工。半太郎の兄弟子。

仁兵衛 中年の商人。

長屋の住人たち (三〜五人)

町人 (大勢)

幕開くと夏の午後の光。平舞台上手に長屋の外壁、

端に半太郎・おすゐの住まいの戸口。下手に、小さ

くて簡素だがよく手が入って清らかな稻荷社。総て

下町稻荷長屋の態。

ト、半太郎の家から仕立て上がりの着物を持って

出てくる商人仁兵衛。

仁兵衛 おすゐさん、それじゃ、貰ってゆきますよ。

おすゐ (カゲにて) ええ、お頼み申します。

ト、戸を閉めて下手に向かう仁兵衛。通りすぎる

長屋の住人、馴染みの仁兵衛に声をかける。

住人 仁兵衛さん。おすゐさんのところかい。

仁兵衛 ああ。仕事が早くて助かるよ。どうでも藪入りに間に合わせたいと先様のお望みで。

住人 へえ、藪入りなら二日も後だ。

仁兵衛 そうなんだよ。あたしも鼻が高いやね。それじゃ、ごめんさいよ。

ト、花道に急ぐ仁兵衛。

向うより小ぶりの大工箱を担いだ半太郎。股引に裾からげ。

二人、花道上よきところで行き合い、

仁兵衛 おお、半太郎さん。ちよいと見ない間にまた背が伸びたな。

半太郎 仁兵衛さん、こんにちは。

仁兵衛 今帰りがい。こう油照りじゃあ、通いの奉公もきついだろう。

半太郎 足をお運びくださって、ご厄介でございます。

仁兵衛 なあに、おすゐさんの仕事なら、上がりを見るのも楽しみさ。(ト、行き過ぎかけて) ああ、そうだ。おまえさんのところは、新盆だな。

半太郎 はい。

仁兵衛 切ないだろうが、おつ母さんによくしておやり。

半太郎 —— はい。ありがとうございます。

ト、仁兵衛、揚幕に入る。

見送って、本舞台に向かう半太郎。稲荷社に神妙に手を合わせ、周囲の僅かな芥を払う。

盆が回って、半太郎・おすゐの家の正面に来る。本舞台尺高の二重。質素で掃除の行き届いた小ぎれいな一間と土間。正面塗り壁、上手に無地の枕屏風、その陰に二人分の布団。行李。無灯の行灯。小さな棚の上に亡夫丁助の位牌。天井近くに神棚。下手土間に台所、水甕と濯ぎ盥、おすゐの草履。総て半太郎母子の住まいの態。

中で針仕事をするおすゐ。半太郎、家に入る。

半太郎 おつ母さん、帰ったよ。(ト、足を濯ぎ、手拭いを濡らして体の汗も拭く)

おすゐ お帰り半太郎。疲れたろ。もうすぐご飯にするからね。

半太郎 そこで仁兵衛さんに会ったよ。おつ母さんの腕を褒めていた。(ト、台所の茄子と胡瓜を見て) いい艶の茄子だなあ。今夜は田楽かい？

おすゐ 田楽もこさえてやるよ。だけどそれはね、精霊馬にす

るのさ。

半太郎 ああ、……父ちゃんの迎え馬だな。おいらがこさえてやろうか。

おすすめ そうしてもらおうかね。おまえは手先が器用だから、あたしがやるよか巧いだろう。

半太郎 馬に鞍をつけようか。

おすすめ そんなことまでしてくれるのかい。そうさね、お父つあんはちいっと鈍くさかったからね。乗りいいほうが喜ぶさ。

半太郎 酔っぱらっておつ母さんをおとうとして、こけてたこともあったつけ。(ト、道具箱から小刀を取り出し、鞍の細工を始める)——おいら、父ちゃんの顔、あんま覚えてねえや。死んじまったときのご面相が、あんまりおっかなかったしさ。

おすすめ ……まだ暑い時分だったからね。日陰とはいえ、めっかるまでに丸一昼夜は経ってたんだ。すっかり、痛んじまつてさ。おまえに見せるのも酷だと思っただけど、でもおまえももう十二だし。お父つつあんにお別れさせずに、焼いちまうのも気の毒だろう。

半太郎 うん。……おいらも、会わせてもらって、よかったと

思う。けどよ、最後の顔だけじゃねえんだ。おつ母さんとおいらを追い出す前さ、父ちゃんいつも酔っぱらってたろう。水ぶくれした顔で居眠ってるか、鬼みてえな顔で暴れてるかでさ。おいら、まともな時分の父ちゃんの顔、もう思い出せねえんだ。——(鞍を見せ)どうだい、おつ母さん。

おすすめ おまえは本当に細かい仕事が巧いねえ。——お父つあんだったね、酒浸りになっちまう前は、腕のいい大工だったんだ。調子がよくって、おつむが大雑把で、後先考えないところが瑕だったけどね、気の弱い、そのぶん性根の優しい人だったんだよ。

半太郎 いいとこのほうが少ねえな。  
おすすめ おまえのことだって可愛がってたよ。おまえが生まれで、大好きだった博打から足洗って。

半太郎 「おれが丁助、倅が半太郎、家に帰れば丁半揃う、それで賭場から遠のいた」って、そう言ってたぜ、前に、酔っぱらった父ちゃんが。

おすすめ それで「半太郎」だったのかい？ いやだね、冗談で言ったのさ。あの人、お酒に飲まれると、まともなことを言いやしない。

半太郎 嘘なのかい？ なあんだ、おいらはずっとそう思ってた。

おすすめ 悪い酒さ。もともと、飲めるたちじゃなかったんだ。それが、おまえが七つの年、仕事で幾つか、へまを重ねて、その頃だよ、無理にでも飲むようになってねえ。そんなに気に病まなくていいって、甚五郎の親方も仰ってくださったんだけどねえ。なんせ、気の弱い人だったから。

半太郎 親方は今でも時々言いなざるぜ。元はと言えば、おれがあいつに酒の味を覚えさせたのが悪いんだ、って。

おすすめ 親方にもご迷惑をかけたねえ。だんだん酒屋の払いが増えて、飲み過ぎるから仕事も度々しくじって。そうするうちにやりくりが苦しくなって、あたしとも喧嘩が絶えなくってさ。

半太郎 おつ母さんの生傷もな。

おすすめ あたしは慣れっこだったけど、おまえがぶたれるのは辛かったね。だからあの人を飲みに出てくれると、口じゃ文句を言いながら、その実、ほっとしたもんだ。

—— 一昨年の暮れもそうだったねえ。

半太郎 夜明け前から父ちゃんがどっかに逃げちまって、おつ

母さんが金策に駆けずり回ったろ。掛け取りが次々に来て、おいらが代わりに頭下げて。

おすすめ おまえにも苦勞させたよね。掛けをなんとか払い切つたら、一文無しになっちまって。これからどうしようって思ってたら、夜更けにふらりと戻ったあの人が、年明けから妙な仕事を始めてさ。あれにはびっくりしたねえ。

半太郎 「いしゃ」ってな。おいらの手習い道具で、板つきれに下手くそな字書いて。

おすすめ 久しぶりに玄能を手にしたと思つたら、朝からガンガンその表札を打ち付けて、ご近所さんがみんな起きちゃってさ。

半太郎 客なんか来るもんかって、おいらたち相手にしなかったな。

おすすめ 世の中わからないもんだねえ。何をどうしたか知らないけど、みるみるお客がついてさあ。それも大店の、お旗本のと、羽振りのいいのばかりでさ。——けどあたしや、怖かったよ。そんな楽におあしが稼げるもんか。あの人はずつかり天狗になっちまって、何を聞いても生返事。遊び歩いて、酒かっくらって——あの人のお酒癖の悪さにや五年も辛抱したけども、あんなわけのわから

ない暮らしにやあ、三月も耐えられなかったねえ。——半太郎、おまえ、あたしと一緒に家を出たこと、ほんとは後悔してないかい。

半太郎　してねえよ。おいら、ぶつ叩いてくる父ちゃんもおっかなかつたけど、大金持ってへらへら帰って来る父ちゃんはおもとおっかなかつた。悪いもんに取り憑かれてんじゃねえかつて、気味が悪くてろくに顔なんか見られなかつた。だから、おつ母さんと家を出て、おいらもほつとしたんだよ。この人たちは皆親切にしてくれるし、大工仕事を仕込んでくださる親方も、おかみさんも兄さんたちも、細々面倒をみてくださるし。今の暮らしが、おいら、好きだよ。——ほら、出来たぜ。(ト、精霊馬を見せる)

おすゐ　ああ、上手だねえ。これならあの人も、安心して乗れるだろうさ。……ねえ、半太郎。おまえ、なんでお父つあんとおつ母さんが「半太郎」って名付けたか、ほんとのところは知らないんだね。

半太郎　うん。

おすゐ　じゃあ、覚えておおき。おまえが生まれたとき、お父つあんと、こう言ったんだよ。「人間、ひとりで生き

られるもんじゃない。周りの人に助けられて、ようやく一人前になれるんだ。それを忘れない人間になつてくれ」ってさ。

半太郎　……そうだったのかい。

おすゐ　いいこと言うだろう、おまえのお父つあんと。結局、あの人は一人で逝つちまつたけど……じゃあ、迎え火を焚こうかね。

ト、おすゐ、用意していた焙烙の木切れに火をつけて戸口の外へ出る。燃え尽きるまで二人、それぞれの思い入れで手を合わす。(その間に盆がゆつくりと回つて家の中が見えなくなる)

火が消えると、おすゐが家の中へ入る。去りかねて、佇んでいる半太郎。

すつぽんから、崩れかけた髷でうらぶれた亡者姿の丁助が現れる。

丁助　半太郎。

半太郎　(ト、辺りを見回し、丁助に目を留め、ぎよつとして)……誰だい。

丁助　おれだよ。丁助だ。おまえのお父つあんの丁助だよ。半太郎　お父つあんと……ほんとかい。ほんとに、戻つて

きたのかい。

丁 助 迎え火を焚いてくれたじゃねえか。あああ、おっ母さんと呼ばなくていい。どうせ見えやしねえ、聞かれもしねえ。おれあ日浅の亡者だからよ、おれとこうして口が利けるのあ、血の繋がったおめえだけだ。(ト、言いながら半太郎の傍へ寄る)

半太郎 そうなのかい。……父ちゃん、こんな顔だったかなあ。

丁 助 おめえ、親の顔を見忘れたか。まあ、無理のねえこつた、死に顔は人相が変わるてえからよ。それより、いいか、半太郎。おれが来たのあ他でもねえ、おめえに仇をとつて貰いてえ。

半太郎 仇!? どういうこつた……父ちゃん死んだの、急な病じゃなかつたのかい。下手人が居たのかよ!?

丁 助 ああ。病なんかじゃねえ、殺されたのさ。だがよ、相手あ人じゃねえ。おれを殺したのあ——死神だ。

半太郎 死神?

丁 助 去年の大晦日、おれあ首括りの松の下で、死神に取り憑かれちまつたんだ。がりがりに瘦せた、貧相な爺いさ。その野郎はおれに医者をやれと吹き込んだ。病人には皆死神が一人ずつ取り憑いてる、そいつが枕の傍に居りゃ

負け、足元に居りゃあ勝ちさ。呪文を唱えて手を二度叩く、そうすりゃ死神は追っ払える、病人は治る、家のもんは礼を言っておれに金を渡す。百発百中だ。しくじりは無え。

半太郎 それが、父ちゃんの金儲けの正体か……けど、なんで——

丁 助 おれが欲をかいちまつた。大金を積まれてな、枕元に居た死神を、足元にして追っ払った。布団をこうくると回して、奴さんの居所を変えたのさ。ところがそいつが畏だった。その死神こそ、おれに取り憑いた野郎だった。端っから、おれを取り殺そうと狙っていたのよ。おれは奴に嵌められて、危ねえ橋を渡らされた。おれの命の蠟燭の火は、あいつに消されちまつたんだ。

半太郎 命の、蠟燭……

丁 助 だからいいか、半太郎。おれの仇は死神だ。お父つあんのだ仇討ちと思つて、おめえはこれから、世の中じゅうの死神を、片っぱじから葬り去れ。

半太郎 お、おいらに、そんなこと——

丁 助 出来るさ。おれだつてあの時まで巧くやつてたんだ。この金がありゃあ、おめえとおっ母さんを迎えに行ける。

お父つつあんが悪かった、堪忍してくれ、戻ってきてくれ  
れって頭下げるともりだった。そこを付け込まれちまっ  
たのさ。おめえたちにいい暮らしさせてやりたくて、大  
金に目が眩んじまった。

半太郎 本当かい。

丁 助 大真実よ。いいか、呪文を教えるぜ。「あじやらかも  
くれんきゅうらいす、てけれつつのばあ」、(ト、手を  
二度叩いて) ばんばん、だ。言ってみろ。

半太郎 「あじやらかもくれんきゅうらいす、てけれつつのば  
あ」。

丁 助 ばんばん、を忘れんなよ。二つ目のばんで死神は消え  
らあ。

半太郎 わかったよ。

丁 助 よし。そんじゃあ、試さしてやる。ついてこい。

半太郎 出掛けんのかい？ どこへ行くのさ。

丁 助 往来さ。死神憑きの二人や三人、すぐめつかるぜ。

半太郎 そ、そんなもん、おいらにや見えねえよ。

丁 助 おれがついてりや見えるのさ。

ト、丁助、するすると先へ立って花道へ行き、立

ち止まって半太郎を招く。

気を吞まれたまま後に続く半太郎。連れ立って向  
うへ入る。

道具替え

## 第二場 両国橋の場(十三日夕)

本舞台の上へかけて両国橋の袂の道具。その傍らと  
下の方にかけて店々が軒を連ね、往来は夕涼みの人  
と物売りで賑わう。川の向こうは灯りのついた浜町  
河岸通りの遠見、川には遊び船の影。総て両国橋夕  
暮れの態。

橋の袂に、風鈴売りが欄干に凭れて立っており、ひ  
どく咳き込んでいる。その足元にほろを纏った老人  
が蹲り、風鈴売りの顔を見上げている。

ト、丁助と半太郎、向うより出て本舞台を望む。

丁 助 そら、見ろ半太郎。あすこの風鈴売り。足元に汚え  
爺いが蹲つてやがるだろ。あいつが死神だ。

半太郎 (ト、おっかなびっくり覗いて) ……人と見分けが  
つ  
かねえや。

丁 助 おれが教えてやるから構やしねえよ。いいか、祓い

てえ死神のな、二間くれえまで近づくんた。

ト、人混みの中を死神の傍へ近づくと丁助と半太郎。

丁助 そうして、呪文だ。手え叩くの忘れんなよ。(ト、

半太郎から離れる)

半太郎 あじやらかもくれんきゆうらいす、てけれつつのばあ。

(ト、手を二度叩く)

ト、死神、悲鳴を上げて姿を消す。

風鈴売り、咳が止まり、表情を明るくする。

風鈴売り ……なんだ？ 急に胸が楽になった……

半太郎 ……出来た！ お、おいらにも出来た！

丁助 易いこつたる。これっぱかした。こいつを、病人の家

でやれあ金になる。

ト、丁助、半太郎の肩に気安く腕を回す。

丁助 いいかよ、倅。おれは丁助、おめえは半太郎。おめえ

とおれとで丁半揃う。二人が居りゃあ無敵つてこつた。

ト、半太郎、丁助の言葉に引つ掛かるこなし。丁

助、意に介さず、

丁助 さ、行こうぜ。稽古代わりだ、もう二、三人、助けて

やろうぜ。

半太郎 おつ母さんが、心配するよ。

丁助 ちよんの間だあな。すぐ戻れら。

ト、どんどん先へ行く丁助。

半太郎、少し躊躇うが、丁助の後を追う。人混み

の中へ分け入って行く丁助と半太郎。

すっぽんより、薄布を被った人物(狐神)がセリ

上がる。水干様の古風な白装束。往來の誰の目に

も見えていない。物言いたげに半太郎を見送って、

再びセリ下がる。

道具替え

### 第三場 甚五郎宅の場(十四日朝)

常足の二重の座敷、いつもの処に勝手口。正面に暖

簾口、上手に仏壇、下手上部に神棚。甚五郎の座布

団と蓑盆。暖簾口の先は台所や寝間に続く心。戸口

内側に外箒と塵取り。総て大工の親方甚五郎宅の態。

ト、道具箱を抱えてやってくる半太郎。戸口を開

けて暖簾の奥へ声をかける。

半太郎 おかみさん、おはようございます。

ト、甚五郎女房おもと、慣れた心で暖簾から顔を

出す。

おもと ああ半ちゃん。おはよう。今日も暑くなりそうだねえ。

半太郎 はい。水を多めに撒いときます。

ト、道具箱を座敷の隅に置き、箒と塵取り、柄杓入りの手桶を持って家の前の掃除にかかろうとする半太郎。

おもと 半ちゃんや、おまえさん、昨日、迎え火はちゃんと焚

けたかい。

半太郎 はい。それで、しっかりと——（ト、丁助が戻ってきた

と言いかけて、口を噤む）

おもと しっかりと迎えが出来たかい。良かったよ。おまえさ

んには、懐かしいばかりじゃないだろうけど、亡くなりや皆仏様だからねえ。

半太郎 ——はい。

ト、暖簾口の奥から甚五郎が現れる。股引を履い

た着流し、仕事前の寛いだ様子。

甚五郎 おう半太郎。

半太郎 親方。おはようございます。すいません、掃除は、こ

れから——

甚五郎 まあ待ちねえ。いいんだよ。箒はそっちに置いときな。

今朝あな、ちいとおめえに話がある。

半太郎 へえ。

ト、半太郎、甚五郎に促されて座敷へ上がり、下手に座す。

甚五郎、箕盆で一服やり始める。

おもとはお茶を淹れに立つ。

甚五郎 どうでえ、仕事の具合は。おいらの見立てじゃ、おめ

えに合ってると思うんだがな。

半太郎 はい。仕事は、面白いです。

甚五郎 おめえ、うちから通うのは、なかなか骨が折れねえか。

半太郎 いいえ、なんてこたありません。たった二人の家だからって、おつ母さんが心細くならねえように、通いの奉公を許してください。親方のご親切に、おいらもおつ母さんも、ありがてえと思つてます。

甚五郎 おめえを特別扱いにして、やつかんでる兄弟子あ居ね

えかい。

半太郎 そんなこと。兄さんたちも、みんな親切にしてくれませう。

甚五郎 そいならいいんだ。おめえが嫌な思いをするようなら、

何にもならねえからな。

おもと (ト、茶を持ってきて甚五郎に出しつつ) ちよいとお  
まえさん。うちの若いのに、そんなみみちい真似をす  
る手合いが居るとでもお思いかい。清さんあたりが聞い  
たら臍を曲げるよ。

甚五郎 おいらだつて何も疑つてやしねえよ。みんな気持ちの  
いい奴らだ。ただ、人間てのあ分からねえもんだからよ。  
丁助だつてそうだ。おう半太郎、おめえ、お父つつあん  
のこと、今じゃあどう思つてんだ。

半太郎 どう、つて……。

甚五郎 許してやれそうかい。

半太郎 ——へえ。

甚五郎 元はと言やあ、あいつに酒を教えたのはおいらだから  
よ。下戸だつたあの野郎に、修行と言つて無理に飲まし  
た。あん時酒に馴染ませなきゃあ、溺れることもなかつ  
たろうぜ。だからよ、半太郎。死んじまつたお父つつあ  
んが出来ねえ代わりに、おめえに仕事を仕込むなあ、お  
いらの罪滅ぼしつてやつだ。おめえが気にするこた無え  
んだよ。

おもと そうだよ半ちゃん。あんた、筋がいいしさ。礼儀も  
ちゃんと心得てる。おすゐさんのお仕込みがいいんだ

ねえ。うちの人も、あんたみたいに利発で覚えのいい子  
に、教えてやれるのが楽しいのさ。

甚五郎 だからな、半太郎。おめえとおつ母さんがその気にな  
りゃあ、おめえ、いつだつてこの家に住み込んでいいん  
だぜ。ちいっと、考えてみつくんな。

半太郎 ——はい。

ト、兄弟子の清二が戸口から威勢よく入ってくる。  
清二 親方あ、おはようございやす。おかみさん、おはよう

ございやす。

甚五郎 おう清二。

おもと 清さん、おはよう。ご苦労だね。

半太郎 兄さん、おはようございやす。

清二 おう半公。表に水あ打つたのかい？ なんだか埃つぽ  
いようだぜ。

半太郎 いいえ、まだ——

甚五郎 許せ許せ、おいらが引き止めちまつたのよ。そんじゃ

頼まあ、半太郎。

半太郎 へい。

甚五郎 清二、他の奴らあ集まつてんのか。

清二 へい、大方。

甚五郎 そいじゃおいらも行くとしよう。半太郎、おめえも掃除が済んだら後から来い。

半太郎 へえい！

ト、おもと、甚五郎に印半纏を着せ、自分の道具箱を担いだ甚五郎に切り火を切つてやる。

甚五郎、清二を伴つて出てゆき、花道へ向かう。

戸口の外に出て見送るおもとと半太郎。

甚五郎、七三で振り返り、おもとに頷き、半太郎

に笑いかけ（半太郎、ぺこりと頭を下げる）、揚

幕へ入る。清二続く。

物売りの呼び声。

おもとは玄関を入れて暖簾口の奥へ。

玄関前を掃き始める半太郎に、物陰から出た丁助が近づく。

丁助 （ト、甚五郎を見るこなしで）あいつも達者そうだな。

半太郎 （ト、手を止めて）……父ちゃん。

丁助 いい、いい。続けな。おれの姿あ余人にや見えねえ。

おめえが変に思われらあ。半太郎、おめえ、今日の昼飯時と八つ時に、死神退治の稽古に出ようや。

半太郎 え？

丁助 顔を上げるんじゃねえ。

半太郎 ……死神探しは、夕刻につて話だったろ。仕事を終えて、うちに戻つたら、飯の前に抜け出して。

丁助 どうも嫌な目がありやがる。——いや、そうじゃねえ、おつ母さんがな。家を空けると不審がる。だからな、昼

間のうちにしようじゃねえか。

半太郎 ……それもそうだ。

丁助 な。そうしよう。おれがおめえの傍についてやれる

なあ、今日明日が正念場。盆が引ける明後日のうちに帰らにやならねえ。今のうちにたあんと稽古して、おめ

え一人でも死神を祓えるようにならねえとな。

半太郎 父ちゃんが居なくつても、死神が見えるようになるのかい。

丁助 ああ。死神と縁のある人間はな、目に映るようになるんだよ。おめえが立派に医者看板を出せりやあ、おつ

母さんにも楽させてやれる。

半太郎 それでも、おいら、大工になるよ。

丁助 そんな、つまらねえ……（ト、言いかけて、思い直し）ああ、大工もいいだろうさ。医者もできる大工になりや

あいい。そんじゃ、飯時にまた来るぜ。

ト、物陰に姿を消す丁助。

丁助の消えたあたりを見て、寸時思い入れの半太郎。気を取り直し、水を撒き始める。

蝉が鳴き出す。

道具替え

#### 第四場 稲荷長屋の場（十四日夕）

前場と同じ長屋の道具。

長屋の人々の姿。思い思いに行き交い、やがて誰も居なくなる。

斜めになった陽の中、花道を半太郎が帰ってくる。稲荷の社を見周り、手拭いを出し、屋根などを拭う。手を合わせ、踵を返した背中に、声がかかる。

狐 神 （カゲにて）待ちや、その子。半太郎。

半太郎 （ト、足を止め）——どなた、さんですか。（ト、辺りを見回す）

陰の声 （カゲにて）わしよ。此処じゃ。

ト、社の後ろから、狐の面で顔が半ば隠れた狐神が現れる。

半太郎 （警戒して）——あなたは。

狐 神 わしはこの社を預っておる狐よ。

半太郎 狐——？

狐 神 稲荷大明神のお使いじゃ。おぬしとおぬしの母が日ごと、まめに掃除をしておろう。その礼に、おぬしを助け

てやろうと思うて参ったのじゃ。

半太郎 助ける？ それは、ありがとう存じますが——おいらも、おつ母さんも、礼を言われるためにお世話してたわけ

じゃありません。

狐 神 それはわしとて承知しておる。

半太郎 ですから、お稲荷さまにお助けいただくなんて——

狐 神 聞け、聞け半太郎。おぬしがこの社に詣でてより今日こんにち

ちようど四百八十日。稲荷の神の満願日じゃ。

半太郎 四百八十？ 聞いたことねえなあ。切りよく千日じゃ

ねえんですか。

狐 神 おぬしはまだ若年ゆえ、数も半分より下でよい。名前も、そうれ、半太郎。

半太郎 それにしたって足りねえや。千の半なら五百日——

狐 神 なんでもよいのじゃ。子どものくせに、細かいことを申すな。

半太郎 なんてえ、神さまのくせに大雑把だなあ。おっ母さん

はどうなんです。もう立派な大人だあな。

狐 神 それなら二人で半分じゃ。二人合わせて千日満願。

半太郎 言ってることが適当じゃねえですかい？

狐 神 よいよい、我ら狐は年増の女性にょしょうを好むでな。

半太郎 (ぎよつとして) 何ですって？

狐 神 勘違いするでない、何も助平なことなど思うておらぬ

ぞ。おぬし、わしが稲荷の使いを疑つておろう。語つて

きかすゆえよつく聞け。ええ、昔、後小松帝の明徳年中、

一人の老いたる命婦あり、深く稲荷を信じ、日々参詣す。

この命婦の飼いたる野狐、参詣の折、必ず先へ社壇へ来

たりて命婦を待ち、社人も、狐の来たるを見て命婦のや

がて詣でるを知る程なり。命婦も年老い世を去りて後は、

狐を養ふ者も無く、年経て死にしを、人隣みて本社の傍

に埋め、社を建てて祀つた。これ、狐を稲荷の使とする

起因なるべし。よつて、我らは皆女人を慕う。年嵩なれ

ば猶のこと。

半太郎 おっ母さんはそんな年寄りじゃあねえですよ。

狐 神 左様左様、いまだ水気が残つておるわ。おぬしの母は、

しわしわの媼になるまで生きるがよい。そのためには、

一粒種のおぬしの身に災いあらば障りとなる。故に、わ

しがおぬしをが守護してやる。おぬしの命と行末は、お

ぬしだけのものではない。

半五郎 そいつあ……ありがとうございます。

狐 神 うむ。

半五郎 おいらは、何に脅かされるってんですか。

狐 神 怪しき者じゃ。冥府の臭いが鼻につく。

半太郎 冥府……？ あの世つてことですかい。

狐 神 そうじゃ。おぬしやおぬしの母の身を、あちらへ引き

ずり込もうとしているやもしれぬ。盂蘭盆会は冥府の岩

戸が緩むゆえ、不心得者も跋扈しおる。

半太郎 ……大丈夫ですよ。幽霊なんか怖かねえし、おいら

にや、死神退治の呪いまじながありやす。

狐 神 油断するなよ。瘦せても枯れても神は神。

半太郎 でも、お稲荷さまもついててくださる。

狐 神 左様。じやよつて、身を慎んで、めしを食え。蚊遣

りを焚いて、よく眠れ。

半太郎 はい。

狐 神 おぬしは、理屈っぽいが、良い子じやの。

ト、半太郎、ぺこりと礼をして家に入る。

半太郎 (カゲにて) おつ母さん、帰ったよ。

おすゐ (カゲにて) ああ、お帰り。今日はちよいと遅かったね。

ト、狐神、半太郎の家の戸をじつと見、母子の声に耳を澄ませ、思い入れ。

道具替え

大詰 甚五郎宅の場 (十五日夜から翌朝)

前場と同じ甚五郎座敷の道具。

甚五郎が座敷の布団に寝かされ、時折苦しげに呻いている。枕元に座り、甚五郎の顔の汗を拭く心配顔のおもと。若い大工たちが膝を揃えて甚五郎を囲んでいる。

ト、向うよりバタバタにて息せき切つて駆けてくる半太郎、その後に遅れて走る、風呂敷包みを背負つたおすゐ。おすゐを氣遣つて並走している清二。

戸を開けるなり半太郎、

半太郎 親方！——おかみさん！(ト、もどかしく座敷に上

がる)

おもと ああ半ちゃん。すまないね、あたしの使いで今日は遠くまで行つてもらつたのに、また呼び出しちまつてさ。

半太郎 そんな！ そのぶん早く帰してもらつて——そしたら、清二兄さんが。

ト、言う間におすゐと清二も追いついて中へ入る。おすゐ おかみさん、どうも親方が、とんだことで——

おもと ああすみませんねえ、おすゐさん、驚かしたでしょう。うちの人が急にこんなことになつちまつて。うちの若いのは一人もんばかりで、女手が無いもんだから、甘えちまつて、堪忍しておくんなさい。

おすゐ 何を言うんですよ、大恩ある親方の一大事じゃありませんか。あたしでお役に立つんなら、何でも仰つてくださいな。なんだか、氣が動転して、そこらのものをあれこれ掻き集めて来ちました。(ト、風呂敷を解く。

中から晒や吸い飲みや、こまごまと現れる。使い込んだ玄能や、胡瓜と茄子の精霊馬まで入っている)

おもと 助かりますよ。風邪ひとつ引いたことない人で、うちんや看病道具も碌に無くて。普請中に急に顔色を変えたとかで、戸板で帰つてきましたね。下手に動かさないほ

うがいいだろうってんで、此処にこうして寝かしてますのさ。

半太郎 お医者は。

おもと なかなか掴まらないんだよ。藪入り前でどこもかしこもてんでこ舞いさ。おすゐさん、すみませんが、その清二も、他の若い衆も、親方抜きの特賞仕事で、今日はいつもの二倍は働いてましてね。おまんまもやりたいし、休ませてもやりたくて。ここでこうして張り付いてても、何が出来るとってわけでなし。

おすゐ そうでしょうとも。ご心配も無理ないけれど、休めるときに休まなくっちゃ。

おもと ありがとう。半ちゃん、おつ母さんをお借りするよ。うちの人を見ててもらえるかい。その暇にあれこれ片付けちまうからね。何かあったら呼んどくれ。さ、あんたたちも。

ト、おもとに促され、若い大工たちとおすゐが共に出てゆく(台所へ向かう心)。

急にがらんとした座敷へ、入れ替わりにふらりと現れる丁助。

丁助 —— 気の毒だなあ、甚五郎。こんなになっちゃって。

半太郎 父ちゃん、死神は。

丁助 ああ居るぜ、そこに居やがる。そうれ。

ト、丁助が半太郎の肩にポンと手を置くと、寝ている甚五郎の頭の傍に死神が現れる。

丁助 見えるだろ。

半太郎 —— 見える、けど、いけねえよ、あいつ、お、親方の、枕元に居らあ。治せねえよ、ど、どうしよう。

丁助 慌てるな。兄さんたちを四つたり呼んで、布団の隅を持たしてな、おめえの合図でくると回せ。甚五郎の足があつちを向いたらすかさず「てけれつつのばあ」だ。それでおめえの親方は助からあ。

半太郎 けど、そ、それじゃ父ちゃんと同じ道じゃねえか。

丁助 いいか、まずあの死神と甚五郎の悪縁を切らなきゃならねえ。切つてからなら五分と五分、あいつは誰かの命の蠟燭をこっちに超越せと言うだろう。そしたらおめえ、—— おつ母さんのをやると言え。

半太郎 そ、そんなこと出来ねえよ！

丁助 親孝行より師匠の恩だ。おれの命を遣れるもんならおれが代わってやりてえが、生憎おれあ魂無しだ。おめえがこんだけ世話になって、おすゐのやつもウンと言わあ。

親方さまが長らえるならあたしの命を差し上げます、どうぞ持つてってくださいまして、おつ母さんなら言うだろう。そういう女だろう、ええ、違うか!?

半太郎 ち、違わねえ。おつ母さんなら喜んで親方の代わりになるだろうさ、けど、だけど、おいらあ——

丁助 甘ったれんな! 半太郎、てめえも男だ、覚悟を決めろい。親方の恩義に報いさせるも、息子のおめえの親孝行だ。忠女賢婦を名乗らして、閻魔の庁に送ってやんな!

半太郎 ——わかったよ。

丁助 了見したか。

半太郎 布団を回そう。

丁助 それでこそおれの倅だ。

半太郎 けど、おつ母さんは死なさねえ。

丁助 ——なんだって?!

半太郎 代わりに差し出す蠟燭が、おつ母さんのであるもんか、おいらの命をやるんだよ。

丁助 半太郎——

半太郎 親方は助ける、おつ母さんも救う。死ぬのはおいらで充分だ。親方の命の値打ちにあ吊り合わねえけど、寿命

の長さであの死神も、どうにか承知をしてもらおう。さあやろう。(ト、奥に向かって) おかみさん! おかみさん!

おもと (どたどたと走ってきて) なんだい半ちゃん、うちの人がどうしたい!?

ト、おもとの後ろから清二や若い大工たちとおすゐも詰めかける。

半太郎 ご安心を、親方はお休みです。兄さん方、若輩者の身で相すみません。お力を借りたいお願いがあります。おいらの言う通りにしてください!

ト、清二たちに手早く説明するこなし。

若い大工たち、戸惑いながらも頷いて、甚五郎の寝ている布団の四隅を掴み、半太郎の合図を待つ。脇で不安げな面持ちながら、見守るおもととおすゐ。

半太郎 いいですかい、——ひの、ふの、み!

ト、大工たちが甚五郎ごと布団を持ち上げ、くると反転させる。

すかさず呪文を唱える半太郎。

半太郎 ——あじやらかもくれん、きゅうらいす! てけれつ

つの一

狐神 待ったア——！

ト、狐神が突如室内に駆け込む。その場の全員が見て驚く。

半太郎 お狐さま！

丁助 なんだてめえは！

狐神 その子の親父さ！

半太郎 なんだって！

狐神 半太郎、おれだ！ おれがほんとの父ちゃんだ！ その

いつの正体は死神だ！ おれに憑いてた張本人さ！

半太郎 死神？ お、おめえが……父ちゃんを取り殺した、死

神だって！

丁助 ——ええ忌々しい、往生際の悪い野郎だ。もうちつと

だったのに。

ト、丁助、扮装を解き、痩せた老人姿の死神の本

性を現す（以降「死神」と表記し、顔を隠してい

た狐神を「丁助」と記す）。

途端にこの場に居る全員に死神と丁助の姿が見えるようになり、驚きの声上がる。

おすゐ ——あんた！

おもと 丁助さん——！

半太郎 と、父ちゃん……どうして、……端はなから……？

丁助 おうよ。この新盆に、懐かしい娑婆に戻ってきたら、

おめえが死神に取り憑かれそうになってるじゃねえか。

けど、野郎はあれでも神様だからな、亡者のおれにやあ

どうにも出来ねえ。手えこまぬいたらよう、お狐さ

まが力を貸してくだすつたのよ。おめえとおすゐが長屋

のお社を日頃大事にしてるだろ。そのご褒美だと仰せで

な。

半太郎 ありがてえ——もったいねえ。

死神 丁助、久しいなあ。てめえをうまく躍らせて、思い通

りに罫に嵌め、まんまと手柄は貰ったが、殺した親父の

姿に化けて、息子の命もおれのもの、死神仲間と丁半

賭けて臨んだ勝負がこのざまか。欲をかいちゃあ、いけ

ねえな。

丁助 この野郎——

半太郎 どうして父ちゃんを狙ったんだ。

死神 何、誰でもよかった。てめえに才が無えくせに欲深え

野郎だったらな。足りねえおつむで考えようが、その実

こっちの思うがまま、もがき回って落とし穴。そのじた

ばたが面白え。おれたち死神の暇潰しさ。

半太郎 この野郎——

丁助 止せ半太郎！——そいつが言うのはほんとのことさ。

おれあ実際大馬鹿だった。けどなあ、親父のおれは大馬鹿でも、おれの息子は出来た坊主だ！ たった一人の倅まで、てめえら下衆に目えつけられて、のうのう死んでいられるか！

半太郎 ——お父つつあん！

死神 吼えるな負け犬。亡者ごときに何が出来る。

丁助 言つたら、お狐さまがついてるってな！

ト、丁助の合図で本物の狐神が現れる（以降、この真の狐神を「狐神」と表記する）。最前までの丁助に似た格好だが、衣はより上等で、風格が漂う。

狐神 （半太郎に笑いかけ）わしが真の稲荷の眷属、鳥居の数を重ねた者じゃ。おぬしと母の気遣い、日頃嬉しく思うておったぞ。それゆえに、おぬしと母を救わんがため、父に力を貸したのじゃ。我が靈力を注いだゆえに、見た目が狐に近づいたがの。

半太郎 ——ありがとうございます！

死神 （せせら笑つて）尻に尾のある毛むくじららが、偉そ

うにぬかしやがる。使いっぱしりめ。片腹痛えや。おれは痩せても神だわえ。同胞、出あえ！

ト、先の死神に呼応し、仲間の死神たちがわらわらと現れ、半太郎たちを襲おうとする。

おすゐ、悲鳴を上げるおもとを庇い、ハツとしたこなしで、傍の風呂敷包みから玄能を取り上げて胸の前で握りしめる。

死神 多勢に無勢というやつだ。諦めて、てめえら全員喰われてしまえ。

おすゐ （激高して）ふざけんじゃないよ。うちの人の取り殺してくれやがって——うちの人は馬鹿だったけど、悪い人間じゃなかったよ！

丁助 おすゐ——

おすゐ これはこの人の玄能だよ！ これで打つてことは、この人が叩くのと同じだよ！ 思い知れ、こんちくしよ！（ト、玄能を振りかぶって近くの死神に打ち掛かる）

半太郎 おつ母さん！

狐神 コン畜生は余計だわ。

ト、神通力で死神を牽制する狐神。

若い大工たちも立ち向かうこなし。

死神が離れて少し回復した甚五郎、上体を起こす。

甚五郎 おい、おもと！

おもと おまえさん！（ト、甚五郎に駆け寄り、背を支える）

甚五郎 おれもおちおち寝ちやいらねえ。清二！ 鑿を出せ。

おもと！ その精霊馬を寄越してくんな。おすゐさん

の風呂敷から出てる、胡瓜の馬と茄子の牛だよ！

清二 へい！

おもと あいよ！

半太郎 親方！ 何を――

甚五郎 鬼に金棒、地藏に錫杖、甚五郎には鑿ってな！ おす

ゐさん、その玄能を貸してください。

おす らい！

ト、甚五郎、鑿と精霊馬、玄能を受け取って、死

神を睨む。

甚五郎 よくも丁助を手にかけてやがって。目にももの見せてやろ

うじゃねえか。

ト、甚五郎、丁助の玄能で鑿を打ち、胡瓜の馬に

目を彫り入れる。

途端、馬が嘶いて、身震いをする。とむくむく膨らみ、本物の馬の大きさになり、死神たちを蹴散らし出す。

甚五郎が茄子の牛にも目を入れると、これも実物大の黒い牛に化して頭突きで死神を追い散らす。

逃げ惑い、或いは抵抗する死神たちに応戦する狐神と大工たち。

おもととおすゐは甚五郎を庇うかたち。

その三人を守るこなしで居た丁助と半太郎。

頃合いを見て、丁助、半太郎の肩を片腕でがっつき

と抱き、もう片腕を前に出す。

丁助 半太郎！ 手を出せ！ あじやらか、もくれん――

ト、半太郎、意図を飲み込んで、片腕を差し出し

つつ、呪文を唱える。

半太郎 きゅうらいす！

丁助 てけれつつの！

両人 ぱあ！

ト、片手ずつの手をばんばん、と正面で打ち合わせる父子。悲鳴を上げて消える死神たち。

一人だけ、丁助に化けていた死神だけ踏みとど

まっつて耐えている。

狐神 同じ死神に二度は呪文が効かぬのよ。しかし動けぬそのうちに、そら、その馬の背に縛り付けて、冥府へ送つてやるがよい。仲間内に恥を晒せば、百年は出て来られまい。

ト、狐神が注連縄を取り出し、それを使って若い大工たちが死神を捉えて縛り上げ、馬の背に括り付ける。そのまま、取り囲んで表へ出す。

狐神、牛に別の注連縄で鼻輪をかけ、後から表へ引いていく。

狐神の合図で馬が走り出し、悔しがる死神諸共揚幕へ消える。

見届けに外へ出た半太郎、空の明るさに気がつく。  
半太郎、家の中へ引つ込んで、

半太郎 夜が明けらあ。——藪入りだよ、お父つつあん。今日は、日が暮れるまで、居られるんだろ。

おすゐ あんた——

丁助 おれも、おめえたちと一緒に、居てえんだけどな。

狐神 この者は、亡者に許される以上の力を借りたのでな。その分、日数が一日少ない。

丁助 もう、帰らなきゃあ、いけねえのよ。

半太郎 帰るつて、何処へだよ。お父つつあんが帰るのは、おいらとおつ母さんのところだろ！

丁助 すまねえ。すまねえな、半太郎。父ちゃんな、生きてるうちに、そこに気づきゃあ良かったんだ。面目ねえ。

馬鹿な亭主で、許してくれ、おすゐ。

おすゐ 本当に、馬鹿だよ、おめえさんは——

丁助 甚五郎。おめえにも、済まねえ。世話をかける。半太郎を、よろしく頼むよ。

甚五郎 ったりめえじゃねえか。頼まれなくなつたつて、半太郎はおいらが一人前の大工にしてみせらあ。丁助、おめえは、死んでも馬鹿だが、おいらの達だダチ。

ト、甚五郎と丁助、目顔で領き合う。

甚五郎 おもと。それから、おめえたち。今日は藪入りだ。奥へ行つて、寝直そうぜ。とんだ庚申会になつちまつた。

ト、甚五郎、おもとに目配せし、半太郎たち一家を水入らずにしてやる心。

おもと、心得て大工たちを指図する。

おもと ほんとだね。さあさ、あんたたち、ご苦労様だったね。帰りたいたいはうちへ帰んな。そうでなきゃあ、中へお入

り。その布団、畳んじまってくれるかい。

ト、甚五郎、おもとの肩を借りるようにして奥へ入る。大工たちも続く。

狐神 刻限じゃ、丁助。

丁助 ——へい。

ト、丁助、表へ出る。

半太郎とおするが後を追って出る。狐神は牛を脇に、七三に立っている。

狐神 この牛に乗ってゆけ。我は社に戻るとしよう。

丁助 ご厄介に、なりやした。

おする お助けくださり、ありがとうございます。

半太郎 ありがとうございます。

狐神 なあに、我ら狐神は、年増にょしようの女性を好むでな。

半太郎 あつ。

ト、狐神、にやりと笑ってすっぽんに消える。

丁助、半太郎に向き直って、膝を折り、顔を突き合わせる。

半太郎 (照れて) なんだよ、お父つつあん。

丁助 おめえにおれの面あ、ようつく見せておきてえんだ。

今度あ、忘れねえでいてくれよ。また来年も来るからよ。

ト、丁助、立ち上がり、不恰好に牛に乗ろうとする。

半太郎とおするが駆け寄って助けてやりながら、忘れねえよ。自分のお父つつあんの顔、忘れるもんかよ。待ってるよ。おつ母さんと一緒に、待ってるからよ。来年の盆も、真っ先に帰ってきてくれよ。

ト、丁助、ようやく牛に跨り、おすると半太郎を見下ろして笑う。

丁助 ありがてえ。そんじゃあ、——達者でな。

半太郎 お父つつあん！

ト、牛がのそりと歩き出し、背の上でぐらぐらと揺れる丁助。何度も振り返って半太郎とおするに手を振り、やがて揚幕に入る。おする、朝の光が眩しいこなしで、

おする まだ、見えるかい、半太郎。

半太郎 見えてるよ。こっち向いて手を振ってらあ、あんなに身を乗り出しちゃ、危なつかしいや。まだ見えてる。まだ……まだ……ああ……(柝の頭)——消えた。

ト、そのまま名残惜しげに東の空を見つめる半太郎とおする。朝の光が二人を照らす。

キザミにて  
幕

弓<sup>ゆ</sup>  
削<sup>げ</sup>  
の<sup>の</sup>  
猿<sup>ざる</sup>  
丸<sup>まる</sup>  
東京都在住